

中国における木材加工の現状と今後の方向

－大連市の木材加工業を事例に－

堀靖人・駒木貴彰・立花敏(森林総研)

はじめに

中国の木材輸入拡大が、国際的な木材価格上昇の要因の1つとされ、中国の木材産業に対する関心が高まっている。中国の木材輸入拡大の背景には、中国国内の木材加工業の生産拡大があり、日本の木材産業による中国での木材製品加工への関与がこのことに一役買っている。ただし、海外企業の中国進出の動機づけとなった海外企業への優遇策の変化、人件費や原料費といった各種費用の高騰など不確定要素が多い。

本報告では、こうした不確定要素を各木材加工業がどのように受け止め、今後どのように展開するのかを、中国大連市における木材加工業の事例から検討する。

研究の方法

日本の木材産業との関係が強い中国大連市にある木材加工工場 10 社から聞き取り調査し、日本向け製品の生産にのりだした経緯、原料の種類、調達先、調達方法の動向、生産加工の動向（生産量、製品の種類）、製品販売の動向を、明らかにするとともに、現時点での原料調達、生産方法、製品販売のメリットと問題点、今後の方向性について検討する。

なお、大連市を調査対象とした理由は、日本での販売を目的とした構造用集成材の JAS 認定工場のほとんどが大連市に立地しており、その動向は日本の木材加工業の展開を考える上でも重要であるからである。

結果と考察

(1) 不確定要素として、人件費の高騰、中国元の切り上げによるコスト高、原油高による輸送、加工費用の高騰（中国のみではない）、優遇策としての来料加工（原料や材料を製造委託主から無償現物支給の形で輸入し、製品を製造委託主に戻す貿易方式）による関税と増徴税（消費税のようなもの）の還付制度の先行き不安があげられる。

(2) 原料調達においては、ロシア材への依存が強い。昨今のロシア産丸太の関税引き上げにより、丸太から製材品へのシフトが見られる。同時に、ロシア材生産の不確実性、違法伐採への危惧からカナダ材へのシフトも一部企業で見られる。

(3) 不確定要素の拡大にともない、大連での木材加工業は、次のような展開方向を余儀なくされると考えられる。第一により人件費の安い、北朝鮮やベトナムなどへの生産拠点の移転、第二に小規模な工場買収による規模拡大にともなう生産の効率化と品質管理の徹底、その一方で、第三に日本の住宅瑕疵保障など規制強化による中国での構造用集成材生産からの撤退と、合板、LVL 生産への転換、である。

連絡先：堀靖人 horijas@affrc.go.jp)